第８期あま市高齢者福祉計画・介護保険事業計画策定委員会書面会議報告書

令和２年３月２５日
福祉部高齢福祉課

会議の名称	第２回　第８期あま市高齢者福祉計画・介護保険事業計画策定委員会書面会議
開催日時	令和２年３月２５日（水）
書面会議開催の経緯について	令和２年３月２５日（水）に甚目寺庁舎で行う予定としていたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から、書面会議での開催に変更
書面会議方法について	①返信期限（３月２５日）を定め会議資料、意見書を全委員に送付する ②事務局は各委員からの意見をまとめ報告書を作成し、全委員へ報告を行う
議題	１　第８期（令和３年度～令和５年度）あま市高齢者福祉計画・介護保険事業計画策定に関する実態調査について
会議資料	１　あま市高齢者福祉計画・介護保険事業計画策定委員名簿 ２　あま市高齢者福祉計画・介護保険事業計画策定に関する実態調査結果報告書
公開・非公開の別（非公開の場合はその理由）	公開
傍聴人の数（公開した場合）	０人
委員	木全　克己　　牧村　順一　　富田　悦充 下方　辰幸　　梅屋　崇　　覚前　淳 渡邉　剛　　藤井　雅臣　　井村　なを子 溝口　日出幸　　村上　千代子　　立松　愛唯 杉本　吉之　　服部　章平　　山岸　千津子 小野　浩司　　木下　晶代
事務局	福祉部高齢福祉課（介護保険係）
委員からの意見の有無	意見あり　　４人（次の通り） 意見なし　１３人

委員からの意見 及び 事務局回答	・結果は、全体的に健康な人が多いが、その結果をどのようにとらえるのか。偏りがあるようにも思える。 ・外出している割合や健康への関心が高い割には、生きがい度が６割と低めなのが気になる。 ・地域づくりへの参加意向が６割だが、お世話役に対しては３割強と低い。地域リーダーは難しくても地域づくりへの参加者はもっと増えても良いのではないか。 ・認知症サポーターへの認知が５割。認知症に対する正しい知識と理解も５割。地域包括支援センターへの認知も５割。さらなる発信、啓発活動が必要である。 ・介護予防に関心がある人が６割強に対して、参加してみたいが３割強。どこで講習やトレーニングがあるか知らないが４割ということは、さらなる関心層への発信、啓発活動が必要である。 ・終末期の場所について「自宅」が５割。ますます在宅介護、在宅看護への体制づくりや地域での支え合い、終末期のあり方について検討する必要がある。 ・あま市市民活動センターを受託し、中間支援、まちづくりに携わっている。あま市市民活動センターは開設から５年半となるが、あま市の市民活動は県内でも遅れていると感じる。住民主体のまちづくり、協働のまちづくりを推進するためには、まだまだ行政の推進力が必要であると感じる。その中でも特に、あま市では地域コミュニティが確立されておらず、そのため、地域包括ケアシステムやコミュニティスクールなど地域単位、地域密着、地域主体で取り組んでいかなければならない施策が遅れている。 ・住み慣れた地域（概ね学校単位）で多世代が交流しながら、支え合っていく仕組みづくりは、まずコミュニティシステムの確立が必要である。 ・あま市は、合併後も字単位での自治中心となっており、コミュニティも機能しているのは字単位で１３ほど。それも活動の中心は高齢者である。したがって高齢者中心の考え方で運営がされており、なかなか若手に継承されにくい。また行事中心であるため、機能的にも資金的にも持続性に限界がある。他地域を見てみると、学校単位でコミュ

委員からの意見 及び 事務局回答	ニティを確立させた上で、地域包括システムを機能させ、生活支援コーディネーターも学区単位で配置されているため、きめ細かな対応となっている。さらにコミュニティスクールにもつながるような動きも可能となり、子育て世代の巻き込みも容易となっている。 ・近年、全国的に注目されているのが、「小規模多機能自治」の考え方。昨年市民活動センターでもコミュニティ交流会で、「小規模多機能自治」を提唱、推進する「川北氏」を招聘して講演会を実施した。コミュニティ運営者の多くが、あま市の現状に危機感を持ったようだ。 ・高齢者にとっての生きがいとは、自分のためだけでなく人の役に立てることだと思う。自分の趣味活動だけでさほど生きがいを感じられないのは、感謝される喜びがないからだ。あま市に限らず現役を引退後の多くの人が、これまでのスキルを活かして地域に還り、地域活動に携わっている。現在、市民活動センターに登録する市民活動団体や、ボランティアの多くがこうした「アクティブシニア」と言われる方々。彼らは本当に生き生きと活動し、しかも元気だ。８０代の方でも今も積極的に活動していらっしゃる。 ・ぜひ、あま市でも地域活動や市民活動へと導き、まずは支える側で活躍しながら生きがいを感じて健康寿命を伸ばし、支えてもらう側の時間をできるだけ短くする仕組みづくりをお願いしたい。 ・地域の高齢者が生きがいを持って地域のことに関わりながら、支え合えるまちづくりができるよう、自身も協力していきたい。 ～計画策定に向けて～ ・「夫婦２人暮らしが約４割」という結果について、今後１人暮らし予備軍となるが、その見通しを立てて対策を立てるべき。 ・あま市の高齢者施策に望むことで、交通手段の整備、高齢者の足の確保のニーズが高い。現状の巡回バスはほとんど利用者がおらず、高齢者にも使いにくいと感じる。それなのにもう何年も走らせている。多くの市民から税金の無駄遣いとの声を聞く。あま市内でも高齢者の車の事故が起きてニュースにもなったのは記憶に新しいが、高齢者の足の確保により、自動車免許を早期に返納することで、事故が減るだけでなく、外出の機会も増え、利便性も高まり、認知症予防につながるはず。ぜひ早急に計画に取り入れていただきたい。 ・回答は大変興味深く、意義のあるものであった。

委員からの意見 及び 事務局回答	・地域包括ケアのヒントになるものが多く、今後の地域包括ケアのために、有用に結果を使う必要がある。惜しむらくは、結果の解析が不十分であること（年代別、同居別等）、アンケート項目が多く、俯瞰的に結果を把握しづらいことがある。また、他地域との比較がない。本報告書には、大変有用な結果が多数含まれており、結果の解析や評価について、学術的・実態的に妥当な解析について、さらに検討することが望ましい。 ～各調査について～ 「介護予防・日常生活圏域ニーズ調査」 ・回収率が 66.9%と回収率は悪くない。しかし、配布数 3000 と、規模が相当大きいアンケートになっている。設問が 70 と多く、中には設問の妥当性が問われるもの（設問 56、69）、年代の解析がなく解析不十分なもの（設問 4～43）、リスク因子としてカットオフ値の妥当性に疑問を感じるもの（設問 9～12、23～29）がある。特に身体機能や不安などの精神心理状態、外出機会などについては年代別の分析が有用と思われる。 【回答】意見を踏まえ報告書に年代解析を反映済 「在宅介護実態調査」 ・1000 件の配布に対して、ケアマネージャーが回答に手伝うことを想定しているにも関わらず、回答率が 53.5%と、「介護予防・日常生活圏域ニーズ調査」と比べて明らかに低く、配布数が支援力を上回っていたと推測する。 「介護支援専門員調査」 ・100 件に対して回収率 85%と高いが、介護員へのセクハラのアンケート項目、住民相互のサービスや、民間サービスについて設問がないことが残念である。加えて、自由記載の設問については該当部門に具体的な意見を伝達する検討を願う。 ・思った以上にアンケートの回収率が多く、皆様の関心には応えていかなければならないと感じた。 ・対象者の方には、アンケートを開いて回答するまでの方法が少し難しかったかもしれないので、考えるべきであった。 ・６５歳以上の方々は免許を返納し車に乗らない方も少しずつ増えている中にあって、公共の機関、病院、クリニック等への移動手段とし

委員からの意見 及び 事務局回答	てタクシーを利用することも多くなると思う。予算が必要となることだが、近隣の市（稲沢市、津島市、愛西市など）へは月に１回程度、初乗り、送迎分は無料というようなタクシーチケットがあると良い。 （今年から稲沢市では「稲沢おでかけタクシー」といって、75 歳以上の後期高齢者、障がいのある方、妊婦さんや産後 6 か月未満の方などは料金が２分の１になるという制度を実施するようである。） ・あま市にもボランティアの方々の努力もあるようだが、まだまだ使い勝手が良くないので、改善していかなければならない。 ・住民の方が困っている。他市のような割引して使えるものがあれば良いと思い、是非ともとの思いで提案する。 １５頁～１６頁 ・４－２、４－３、４－４：今回がはじめての問か。 【回答】前回（第７期）においても同様の質問はあった。 ・４－２、４－３、４－４：前年度があれば括弧書きでもよいので表記してはどうか。更にそれに対してコメントを入れるのはどうか。 【回答】今回の報告書では、前回比較を載せているものもあるが、単純な質問（はい・いいえで答えるもの）については、載せていない。また、当該３問については、前回と比較して特筆すべき変化は見られなかった。 ２３頁 ・５－７、５－８：「できない」だけでなく、その場合どのようにしているのかを示す。個人としてか、行政としてか、あるいはその他の方法か、どうしたら解決するかをうながす質問内容を考えさせることを付記してほしい。 【回答】アンケート結果は、調査の結果のみを載せている。来年度からの計画策定委員会の場で、アンケート結果を考察し、必要な事業を検討していくことになる。 ２９頁 ・５－１９：「口腔機能の低下」の重要度を考えてのコメントを入れる。 【回答】「口腔機能」のことは重要だと考えている。今回初の試みとして３２頁～３３頁のクロス集計の結果を加えた。認知機能のリスクありの場合、認知機能のリスクなしと比べて口腔機能のリスクが多くなるという結果が出ている。

委員からの意見 及び 事務局回答	３４頁 ・６－１：参加%の１桁に対して、どうしたらよいかの前向きに参加をうながすコメントを入れる。 【回答】前回アンケートにおいても同様に１桁だった。来年度からの計画策定委員会の場で、このアンケート結果から、必要な事業を考えていくことになる。 ６８頁 ・１１－１１：「かかりつけ歯科医」という文言を、選択肢の「かかりつけ医」のあとに追記してもらいたい。 【回答】今回のアンケートについては、すでに完了してしまっているので、次回（第９期）のアンケートにおいて追記したい。